

音楽教科書から見たシンガポールの国民文化形成

石井 由理

The Formation of National Culture Reflected in Music Textbooks in Singapore

ISHII Yuri

(Received December 21, 2017)

キーワード：ナショナリズム、国民文化、音楽教育、シンガポール

はじめに

ナショナリズム、言語、近代学校教育の間には、深い関連性がある。ナショナリズムとは古い時代から自然に形成されてきたものではなく、近代国家ができる過程の中で国家によって作られたものであることが、多くの研究者によって指摘されている (Gellner, 1983; Hobsbawm, 1990; Anderson, 2006)。ヨーロッパでは、近代化によって、それまで農業に携わっていた人々が生まれた土地を離れて労働者として移動するようになり、職場で多様な人々とコミュニケーションをとるための共通言語が必要になった。さらに印刷技術の発達によって新聞などをおして書かれた共通言語によるコミュニケーションが広まった。Anderson (2006) は、こうして誕生した共通の言語を理解する人々がもつようになった連帯感を大衆言語的ナショナリズム (popular linguistic nationalism) と呼び、やがて大衆から孤立することを恐れた統治者たちが、ヨーロッパの支配階層の民族を超えた共通語であったラテン語に代えて民衆と同じ言語を話すようになり、大衆言語的ナショナリズムを自分たちの求める形に修正して民衆に普及させようとしたのが、公定ナショナリズム (official nationalism) であるとしている。近代学校教育制度はこの公定ナショナリズム普及のための手段であり、国民に共通の言語やアイデンティティーを浸透させていく役割を担った。音楽教育も学校教育の一部として公定ナショナリズム普及のために一役かっている。たとえばHobsbawm (1990:92) は、巨大なハプスブルグ帝国が広大な領土を失った1920年代に、自身が小学生として新しい小さなオーストリアへの愛国心を歌詞とした新国歌を歌った経験をあげ、国歌がいかに公定ナショナリズムを普及させるために用いられたかを述べている。また、HebertとKertz-Welzel (2012) は、ナショナリズムと愛国心は長年にわたって音楽教育の発展とともに存在してきたものであり、世界各国の音楽教育のカリキュラムにとって、なくてはならない要素であったと論じている。

このようなナショナリズムがアジアで広がったのは19世紀後半のことであるが、そこでは近代化の結果としてのナショナリズムの誕生と国民国家の形成という過程を踏むことなく、既存のヨーロッパモデルを模倣すべき対象として取り入れたため、ナショナリズムと近代化は始めから一体のものとして取り入れられた (Anderson, 2006)。そのために、アジア諸国では近代化のための西洋化を進めつつ、国民国家形成のために、自らを他者と区別するナショナリズムを高めるという、相矛盾する二つの過程を進めることになったのである。

音楽教育においてもこの二つを両立させる努力がなされた。たとえば、独立国であった日本では、近代国家としての形を整えるべく西洋諸国同様に国歌にあたる曲が必要だとされ、日本に古くからある詞に西洋音楽を取り入れた曲をつけた「君が代」を創作した。また、近代日本に相応しい音楽文化として、西洋音楽の影響を受けた曲に日本的な歌詞をつけた唱歌を作り、学校教育をおして普及させた。同じく独立国であったタイにおいては、学校教育の普及が遅れたためにその影響は限定的であったが、チュラロンコン王時代にタイ語歌詞と西洋音楽の特徴を合わせ持つ「サンスーンプラバーラミー (国王讃歌)」という、国歌に相当する曲を創作している。また、1930年代には、音楽文化の近代化をはかるべく新たな国歌が作られたほか、

1920年代にワチラウド王によって書かれた愛国的な詩に西洋的な曲をつけ、ラジオ放送による普及をはかっている (Maryprathis, 1999; Bangchuad, 2012)。これらの国は、支配層と大衆が異なる言語を話すというヨーロッパのような状況ではなかったため、大衆言語的ナショナリズムを経ることなく、比較的容易に支配者層の使う日本語やタイ語を国家の共通語とすることができ、その言語を歌詞としてもつ曲にナショナリズムの育成を託すことができたのである。

しかし、全てのアジアの国が日本やタイのような状況にあったわけではなく、20世紀半ばからの独立および国家形成の中で、それぞれの状況に応じた近代化とナショナリズム形成の両立を試みていくことになる。本稿が焦点を当てるシンガポールも、近代化がアジアに及んだ19世紀末にはまだイギリスの植民地であったため、経済的な近代化が進む一方で、国民国家形成は20世紀後半の独立後によりやくとりかかることとなった。また、その成り立ちは、華人の多いシンガポールを国の一部として抱えこむことを嫌ったマレーシアのマレー・ナショナリズムのあおりを受けて、その副産物として独立せざるを得なかったというものであり、言語をとおしたアイデンティティを共有する民族が望んで独立を果たしたというものではなかった。よって、大衆言語的ナショナリズムの基盤は全くなく、国のリーダー層を構成しているマレー半島で生まれ育った華人は英語を話し、他の国民はそれぞれの出身地であるマレー語、様々な中国語、タミル語などの言語を話していて、マレーシア、中国、インドに対して愛国心をもつ住人たちであった。本稿では、このような背景をもつシンガポールが、学校音楽教育をとおしてどのように国民形成を試みたのかを、国の政策とその時代の音楽教科書の内容に着目して考察していく。

1. 独立前後

1824年にイギリスの植民地となったシンガポールは、貿易港として発展する中で中国やインドから多くの労働者を受け入れたため、やがて華人の数がもとから住んでいたマレー人の数をしのぐようになった。1959年にイギリスから自治権を獲得した時の首相が、後にシンガポール建国の父と呼ばれるようになるリー・クアン・ユーである。1963年には1957年に同じくイギリスからの独立を果たしていたマラヤ連邦に加わってマレーシア連邦を形成したが、マレー人を中心としたマレーシア政府と華人を中心としたシンガポールの政治的リーダーの間の溝は埋めがたく、1965年にはマレーシア連邦から追われる形で独立国家となっている。植民地時代に中国、インド、マレー半島から働きに来ていた労働者にとってみれば、自分たちの日常生活とはかけ離れた政治の世界で決められた国家の再編成であり、自らのアイデンティティは中国人、インド人、マレー人のままであった。よって、独立国家になったにもかかわらず、当時のシンガポールにはシンガポール・ナショナリズムなどは存在しなかったのである (Velayutham, 2007:10)。

イギリス植民地から自治権を得てマレーシア連邦に加わるまでのシンガポールの変遷は、当時の音楽教育にも反映されている。南洋工科大学のシンガポール・インスティテュート・オブ・エデュケーション教授である Chia Wei Khuan¹ が作成した資料によれば、20世紀初頭に交響楽団が設立されて以来、イギリス本国のトリニティー・カレッジ・オブ・ミュージックに進学するための音楽学校が作られる、若者や子どものためのオーケストラが結成される、教会の聖歌隊の活動が行われるなど、シンガポールの音楽教育発展の歴史は西洋化そのものであった。1935年以降、学校での一般的な音楽教育が行われるようになるが、1940年のシンガポール・ジュニア交響楽団の結成、1948年のイギリス王立音楽検定 (ABRSM) 試験の実施など、イギリス植民地としての音楽教育が続いた。また、国歌も当然のことながらイギリス国歌であった。当時の学校教育は、教授言語の違いによって英語で教育が行われる英語学校、中国語で行われる中国語学校、マレー語で行われるマレー語学校、タミル語で行われるタミル語学校に分かれていたが、英語学校ではイギリスをはじめとする西洋の歌を歌うことが多かった。一方、それ以外の言語で教育を行う学校では、それぞれの文化の中にある歌を歌っていたということである。

自治領となる準備をしていた1956年、シンガポール政府は、英語、マレー語、中国語、タミル語を公用語として同等に扱い、英語を主たる教授言語にする一方でマレー語を国語とする政策を定めた (Gopinathan, 2013:70; Gopinathan & Mardiana, 2013:18)。また、自治権を得た1959年には、1958年にシンガポール市議会の公式歌として Zubir Said によって作曲された「Majulah Singapura」を新しい国歌として選んでいるが、その理由は、当時はまだ英語人口が少なかったシンガポールにおいて、マレー語の愛国的な歌詞はわかりやすく、多民族社会シンガポールの全ての人に訴える内容だと考えられたからである (Sim, 2014)。Chia Wei

Khuan教授の資料によれば、1959年からは政府は学校の音楽のカリキュラムにシンガポールのローカル色を反映させる努力も始めている。

このように、イギリスから独立するとともにマラヤ連邦の一部としてマレー社会との共存を望んでいた時代には、言語政策、学校教育政策、国歌および音楽教育のいずれにおいても、英語および主要3民族の言語、文化を平等に扱う中で、ナショナリズムに最も深く関わる国語、国歌をマレー語にするなど、マレー社会の一員としてシンガポールを位置づけ、そのためのアイデンティティーを築くために努力をしていたことが伺える。

2. 独立から1970年代まで

1965年にシンガポールは独立したが、その人口および領土の規模の小ささから、シンガポールが独立国家としてやっていくことは困難だろうと考えられていた。この時からシンガポール政府は、シンガポール人としてのアイデンティティーをもたない国民の中にシンガポール・ナショナリズムを育てることと、国家としてやっていけるだけの経済的な発展を遂げることの、二つの国家プロジェクトに取り組んでいくこととなる。この国家の脆弱性は、現在に至るまでシンガポール政府が国民をまとめる際に用いるレトリックとなっている (Brown, 2000)。脆弱性ゆえに国民はシンガポール・ナショナリズムをもって国に貢献することを求められるのであるが、シンガポール・ナショナリズムの内容として一貫しているのは、国民を構成する民族間の平等と経済発展であり、そのほかのナショナリズムの中身は時代によって変遷してきている。Velayutham (2007)によれば、1970年代にかけて期待されたのは、経済的な豊かさを実現することによって人々がその豊かさに誇りを感じ、「シンガポール人」意識が生まれることであったが、1970年代半ばになると、シンガポールの人々が西洋化しすぎていて東洋的な価値観が失われているのではないかという危惧も唱えられるようになった。

学校教育に関しては、1966年にバイリンガル政策が導入された。これは、前述した教授言語の違いにもとづく4つの異なるタイプの学校制度を維持しつつ、そこに通うシンガポールのすべての子どもに対し、英語と母語の学習を義務付けるものであり、それによって子どもの将来の雇用の可能性を広げるだけでなく、民族間のコミュニケーション障壁を取り除き、シンガポール社会を統合することができると考えられた (Kwong, Peck & Chin, 1997)。この政策は教育を受けるすべてのシンガポール人をバイリンガルにしていくという政策であり、様々な母語をもつシンガポール国民の共通語としての英語の位置づけが明確になった政策でもあった。

音楽教育に関しては、1964年に選択教科となった小学校の音楽が1960年代末には必修教科となり、国歌に加えて主要3民族と英語の歌を教えることによって、シンガポールの異なる民族集団間にお互いを尊重する気持ちを育てることが期待された (Chong, 1991)。この間の音楽教科書の変化は、1960年代半ばに教育省の音楽視学官であったAisha Akbarによって書かれた教科書と、1970年代初めに教育省の音楽教科書委員会が出版した教科書の違いに顕著に表れている。Akbarによって書かれた教科書は、1965年に出版され1972年まで使用された『Let Us Sing』という2冊組の歌集で、それぞれに28曲と29曲の英語の歌が掲載されているほかは、他の言語の歌は含まれていないため、英語学校で使用されたものであろうと考えられる (Suriati Binte Suradi, 2005)。これに対して音楽教科書委員会によって小学校低学年用に編集され、1971年に上巻、1972年に下巻が出版されて1977年まで使用された『Sing and Enjoy』の2冊組の教科書の曲は、全てシンガポール人によって作曲されたものであり、同じ曲が英語、マレー語、中国語 (北京語) で掲載されている (Music Textbooks Committee, 1971; 1972)。いわば1冊の歌集を3言語に翻訳したような形態であるが、なぜタミル語が含まれなかったのかは不明である。同教科書冒頭に記されている編集意図によれば、それまでシンガポールの学校で教えてきた歌は、常に他の民族や外国の歌であり、シンガポール人の歌ではなかったため、シンガポール人に作曲された自分たちの歌が必要であると考えたということである (Music Textbooks Committee, 1971; 1972)。『Sing and Enjoy』はシンガポール人の手によって作られた、よってシンガポールにしかない曲を、全く同じ内容の目次で並べて、3言語で教えようとした試みであり、それぞれの言語集団間にシンガポール人としての一体感をもたせようとした意図がうかがえる。さらに、国民の結束を高めるためにナショナル・ソングスが導入され、4つの言語の推奨歌のリストがシラバスに添付された (Chong, 1991: 56-57)。1970年代は政府が国民の西洋化の行き過ぎを危惧し、西洋大衆文化を嫌ってア

ジアの価値観を強調した時代であり (Kong, 1999)、Chiaの資料によれば音楽教育においても「ローカル化」(シンガポール化) が強力に進められた時期であった。

1977年になると、オルフ・メソッドの要素をもった『Music Making』という6冊組の教科書が政府の教育出版社より出版された (Suriati Binte Suradi, 2005)。これまでの歌唱のみの教科書とは異なり、歌唱のほかに楽器演奏、音楽の創作と鑑賞が含まれており、政府の目指す音楽教育が、シンガポール・ナショナリズム育成一辺倒の音楽教育から音楽そのものを理解し身につけることを視野に入れた教育へと変化したことがわかる。またそれと同時に、『Sing and Enjoy』と比較すると英語曲の占める割合が大きくなったこと、中国語曲に対するマレー語曲の割合が小さくなったことがわかる。Suriati Binte Suradi (2005) によれば、第一冊に含まれる曲は全42曲で、その歌詞の内訳は英語21曲、中国語8曲、マレー語3曲、中国語と英語10曲である。同様に、第二冊に含まれる曲は全41曲で、内訳は英語24曲、中国語9曲、マレー語6曲、中国語と英語2曲、第三冊に含まれる曲は全25曲で、内訳は英語15曲、中国語6曲、マレー語4曲、第四冊に含まれる曲は全24曲で、内訳は英語10曲、中国語8曲、マレー語4曲、その他2曲、第五冊に含まれる曲は全32曲で、内訳は英語16曲、中国語8曲、マレー語5曲、中国語と英語2曲、その他1曲、第六冊に含まれる曲は全37曲で、内訳は英語15曲、中国語13曲、マレー語2曲、中国語と英語4曲、その他3曲である。それぞれの言語の曲を合計すると、英語曲は101曲、中国語曲は52曲、マレー語曲は24曲、中国語と英語の2言語の歌詞の曲が18曲で、英語、中国語、マレー語の曲の数の比率はほぼ4 : 2 : 1となり、それに中国語と英語の2言語の曲を加えるとだいたい5 (英) : 3 (中) : 1 (マ) となる。タミル語の曲は含まれていない。この教科書からは、英語と並置してアジアの価値観を強調した時代から、英語を中心に据えるとともに音楽のもつ普遍性を重視した方針へと変化したことが読み取れるが、英語曲がもともと英語の曲なのか他言語から英語に翻訳した曲なのかはSuriati Binte Suradiの研究では述べられていない。

3. 1980年代

1970年代末までにシンガポールでは就学年齢の子どもがほぼ全員小学校に入学するようになっていたが、その一方で、読み書き能力が不十分なまま学校教育を終える若者の存在が問題となるとともに、全ての子どもに2言語習得を義務付けてきたバイリンガリズムが当初の期待とおりに達成されていないことが明らかになった (Gopinathan & Madriana, 2013:19)。この問題への解決策として小学校教育において1980年に導入されたのが、小学校3年生末の試験の結果に基づいて学力別に①ノーマル・バイリンガル・ストリーム：英語と母語の2言語を学び、6年生末の小学校卒業試験 (PSLE) を受ける②延長バイリンガル・ストリーム：子どもたちは英語と母語の2言語を学び、8年生末にPSLEを受ける③モノリンガル・ストリーム：子どもたちは職業訓練のための言語と基礎的な算数を学び、8年生末に小学校達成試験 (PSPE) を受ける、の3つのコースに分けるというシステムであり、同様のシステムが中等教育レベルにも導入された (Gopinathan & Madriana, 2013:20)。これまで民族・言語の違いのみが基準であった分類に替えて、シンガポール人全体に対して能力という別の基準による分類も行われるようになったということである。

1980年代はまた、アジアでありながら近代性をも合わせ持つシンガポールという、新しいナショナリズムへの転換がはかられた時代でもある (Brown, 2000:101-102; Velayutham, 2007:11)。1970年代に植民地時代からの脱却を目指して唱えられた反西洋的価値観の動き以降、1980年代の前半までは、華人、マレー人、インド人の伝統的アジアのアイデンティティーによるシンガポール・ナショナリズムを求める政策がとられた。教育においても、アジア的価値を教えるべく、1984年に公立学校にも宗教教育が導入された。しかし、このような政策はもともと中国、マレーシア、インドにアイデンティティーをもっていた各民族を、再び分断してしまう危険性を伴っていた。そのため、政府の推進するシンガポール・ナショナリズムは、中国、マレー、インドというアジアの伝統に回帰するナショナリズムから、上述の「アジアであり近代的」なナショナリズムへと変化し、宗教教育も5年間実施された後に廃止されることになった (GopinathanとMadriana, 2013:19)。

音楽教育においては、1970年代末から取り入れたミュージック・メイキングを引き継いで、1982年にコダーイ・メソッドに基づく小学校音楽教科書『Active Approach to Music Making』が出版され、1998年頃まで使用されたが、音楽教育における政府の関心の中心はやはり4つの言語文化の尊重、国家建設、公民教育であった (Chong, 1991)。また、学校音楽以外にも1984年にシング・シンガポール・フェスティバルが始

められ、その歌集が1988年に出版されたほか、1986年には「コミュニティ・シンギング・プロジェクト」が始まった（Chiaの資料による）。しかしChong（1991:121）は、このようなシンガポールの音楽文化作りや4つの言語の強調にも関わらず、音楽教育の概念そのものは西洋モデルから脱却することはなかったとしている。中国、マレー、タミルの歌でさえ西洋音階で書き表されたものであったし、音楽の専門教育を受けていない小学校の教師たちが教えたのは、馴染みのある英語の歌や自分の民族の歌であり、シンガポールを構成する他の民族の歌を歌うことによる民族間の相互理解という、政府の望んだ実践にはつながらなかったということである。

4民族の音楽文化の尊重を唱えながら実際には西洋の音楽概念から脱却しないという現象は、シンガポール・ナショナリズムの象徴であるはずのナショナル・デイ・ソングにも表れている。これらの曲は英語で書かれた愛国的な歌詞と、それを他のシンガポールの言語に翻訳した歌詞をもっていたが、1980年代半ばに書かれた初期のナショナル・デイ・ソングはカナダ人作曲家の作品であったし、後のシンガポール人のミュージシャンによるナショナル・デイ・ソングもまた西洋ポップス調の曲であった。

以下では、このような時代に政府によって編集、発行された音楽教科書である『The Active Approach to Music Making』の内容を、Sharmini D/O Kesevamoorthy（2011）の分析と筆者が行った同教科書の教師用指導書の調査をもとに見ていく。Kesevamoorthy（2011）の研究は世界各地の音楽を教えるワールド・ミュージックの視点が教科書にどのように取り入れられているかを調査したもので、シンガポールのエスニック音楽として中国、マレー、タミルの歌の3項目に分類し、そのほかを6大陸の歌（外国曲）、教育目的のための歌および歌の起源が示されていない曲の2項目に分けて、計5項目の分類を行っている。シンガポール人自身のほとんどがもともと外国からの移住者であるため、シンガポールのエスニック音楽とされた曲には、中国、マレー半島、インドのものも含まれる。しかし2000年代の曲の分析では外国曲の中に「中国」の歌も出てくるため、言語のみに基づく分類ではなく、シンガポール人にとって自分たちの民族の歌とみなすかどうかという基準で分類されたことがわかる。この教科書に関しては、掲載曲分類の際の民族と言語はすべて一致している。外国曲に関してはどの国の曲か、掲載時に翻訳されているかどうかは示されているが、どの言語で掲載されているかは明記されていない。また、教育目的の曲に関しても何語の歌詞であるかが示されていない。しかし、筆者自身がこの教科書の掲載曲とKesevamoorthyの調査結果を比較した結果、Kesevamoorthyが外国曲に分類した曲の翻訳された歌詞も、教育目的の曲の歌詞も英語であることが確認された。

Kesevamoorthyの調査結果によれば、シンガポールのエスニック音楽のうち、第一冊に含まれる中国語の歌は補充歌曲の8曲、マレー語の歌は補充歌曲の4曲、第二冊に含まれるのは中国語が補充歌曲に6曲、マレー語が歌唱教材に1曲と補充歌曲に3曲の計4曲、第三冊に含まれる曲は、中国語が補充歌曲に3曲、マレー語が歌唱教材に1曲と補充歌曲に3曲の計4曲、第四冊に含まれる曲は、中国語曲が補充歌曲に4曲、マレー語曲が歌唱教材1曲と補充歌曲2曲の計3曲、第五冊に含まれる曲は、中国語曲が補充歌曲に3曲、マレー語曲が歌唱教材1曲、第六冊に含まれるのは中国語曲が補充教材に2曲、マレー語曲が歌唱教材に1曲と補充歌曲に2曲の計3曲、タミル語が補充教材に1曲である。全冊を合計すると、中国語曲は補充教材に26曲、マレー語曲は歌唱教材5曲と補充教材14曲を合わせた19曲、タミル語曲は補充教材1曲となる。筆者自身の調査では、これらに加えて英語と中国語の歌詞を持つ曲が25曲含まれているので、中国語歌詞を持つ曲は実際には51曲となる一方、マレー語と英語を歌詞に持つ曲は2曲にすぎず、マレー語曲と合わせても21曲にしかない。一方、英語の歌の数は、英語のみの歌詞が188曲、英語と他の言語の両方の歌詞を持つ曲が21曲で、合わせて209曲であり、圧倒的に多い。英語曲、中国語曲、マレー語曲の比率は約20:5:2となり、前シリーズと比較していっそう英語への傾斜が進んでいる。しかし、実際には、英語曲のうち原曲が英語の歌詞の歌は36曲で（Kesevamoorthy, 2011）、他はドイツ語やハンガリー語などの他言語を英語に訳した歌詞である。このことから、英語の歌詞の曲の多さは、旧宗主国であるイギリスの歌によるものではなく、シンガポールの4言語以外の歌詞をもつ歌をシンガポール人全員がわかる英語に翻訳したためであり、音楽的にはワールド・ミュージックの要素が強い教科書となっていると言える。

4. 1990年代

1990年代は、シンガポールは世界をその後背地として活用しなくてはならないということを政府が認識し、

アイデンティティー政策を「アジアで近代的なシンガポール」から、「グローバルでコスモポリタンであるシンガポール」へと転換した年代である (Velayutham, 2007:11)。そして、国家経済の発展のための新たな分野を開拓すべく政府が力を入れたのは、欧米の人気ミュージカルや大衆音楽の有名な歌手の公演をシンガポールに誘致することによって近隣のアジア諸国からの観光客を引き寄せようという、エンターテインメント産業の発展であった (Kong, 2007:15)。これは欧米大衆音楽を有害なものとして嫌い、シンガポール人作曲家の作品によるシンガポールの音楽文化の発展をめざした1970年代とは大きく異なる政策の転換である。シンガポール政府は、グローバル化にいかに対応し、経済的に機能するには小さすぎるシンガポールを世界の資本の流れの中にいかに位置づけるかを常に考えて、その経済戦略を決めており (Sim, 2013:67)、この転換も、エンターテインメント産業の発展のために欧米大衆音楽のグローバル化の波に乗ろうという戦略であった。

経済的発展のためにグローバル化の波に乗る政策を取る一方で、他の国々同様に、グローバル化現象のもう一つの側面であるとされるナショナリズムの強調も同時に現れている。1997年に政府によって導入された「ナショナル・エデュケーション」がそれである (Gopinathan, 2013:28)。当時の首相ゴ・ケン・スイの説明によれば、「ナショナル・エデュケーション」は、シンガポールの脆弱性の認識をもつ建国世代と、それをもたない若者世代との間にある知識のギャップを埋めるための解決策であり、「国民であるということの共有された感覚 (shared sense of nationhood)」のような「直観 (instinct)」を子どもたち一人一人に育てるためのものであった (Sim, 2013:69-71)。

音楽教育では長らく『Active Approach to Music Making』が教科書として使われていたが、これに代わる教科書として教育省によって編集されたのが1998年発行の『My Music Book』6冊組である。冒頭には、この教科書に掲載されているアクティヴィティーは、1981年から1987年までの『Active Approach to Music Making 教師用マニュアル』のプログラムに沿ったものであるという記述があり、演奏・演唱のほか、音楽を聞くことと作ることから構成されて、教科書全体をとおして身振りとともに歌うようにという指示が盛んに出てくる (Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore, 1998)。また、全教科書の始めに国歌が掲載されている。『My Music Book』に関しても、前節同様に Kesevamoorthy (2011) の分析にもとづきつつ、筆者自身の調査結果も踏まえてその内容を考察していく。

第一冊には全44曲のうち、シンガポールのエスニック音楽として中国語歌唱教材3曲、同補充歌曲4曲、マレー語歌唱教材3曲、同補充歌曲1曲、タミル語歌唱教材1曲、同補充歌曲1曲の計13曲が掲載されている。第二冊では、全50曲のうちシンガポールのエスニック音楽は15曲で、その内訳は中国語の歌唱教材3曲、補充歌曲2曲、マレー語の歌唱教材4曲、補充歌曲3曲、タミル語の歌唱教材2曲、補充歌曲1曲である。第三冊では、全38曲のうちシンガポールのエスニック音楽は10曲で、中国語歌唱教材2曲、同補充歌曲2曲、マレー語歌唱教材2曲、同補充歌曲2曲、タミル語の歌唱教材1曲、同補充歌曲1曲が含まれている。第四冊は、全35曲のうちシンガポールのエスニック音楽は10曲あり、そのうち中国語歌唱教材が2曲、同補充歌曲が1曲、マレー語歌唱教材が2曲、同補充歌曲が2曲、タミル語歌唱教材が2曲、同補充歌曲が1曲となっている。第五冊は全22曲の掲載曲があり、シンガポールのエスニック音楽10曲のうち中国語歌唱教材は2曲、同補充歌曲2曲、マレー語歌唱教材2曲、同補充歌曲1曲、タミル語の歌唱教材2曲、同補充歌曲1曲となっている。第六冊は全28曲のうちシンガポールのエスニック音楽は9曲含まれ、内訳は中国語歌唱教材2曲、同補充歌曲1曲、マレー語歌唱教材1曲、同補充歌曲1曲、タミル語歌唱教材2曲、同補充歌曲2曲が掲載されている。第一冊から第六冊までの全体では中国語が26曲、マレー語が24曲、タミル語が17曲となる。

一方、第一冊から第六冊までを通して、英語の歌詞を持つ曲は圧倒的多数を占める。第一冊には英語の歌詞の曲は全31曲あり、このうち前述のKesevamoorthy (2011) の研究で外国曲とされているものは13曲、教育目的の曲とされているものは18曲である。外国曲の内訳はアメリカとイギリスの曲が10曲、カナダおよびハンガリーの曲で英語に翻訳されたものが3曲ある (Kesevamoorthy, 2011)。以下、外国語曲の分類はKesevamoorthy (2011) の分析に基づき、教育目的の言語は筆者自身の調査に基づいて記述する。第二冊は外国曲10曲のうち英語の歌詞の曲は9曲で、うち3曲はフランス語歌詞からの翻訳である。残る1曲はモロッコの歌で、歌詞は英語に訳されている。教育目的の曲は25曲で、1年次に習った英語曲を身振りで歌うなどのために再掲載しているものも含まれるが、いずれも英語の歌詞をもつ曲である。第三冊は外国曲15曲を含み、そのうちの7曲がアメリカ、オーストラリア、イギリスの英語曲であり、7曲がハンガリー、ドイ

ツ、オランダの歌の英語への翻訳である。残る1曲はアメリカの器楽曲である。第三冊からリコーダーの演奏が入るため、教育目的の曲に関しては歌詞のない曲が多数掲載されているが、歌詞をもつものはすべて英語である。第四冊の外国曲は13曲である。このうち6曲が南北アメリカおよびイギリスの英語曲、5曲がドイツ、フランス、チェコの曲の英語翻訳、2曲が韓国とニュージーランドのマオリ族の歌で、原語の歌詞のままである。教育目的の曲の多くは英語歌詞曲およびリコーダー演奏用であるがもとは英語歌詞をもつものである。第五冊の外国曲は8曲である。そのうちアメリカおよびイギリスの英語曲が3曲、ドイツ語曲の英語訳が3曲、インドネシア語曲が2曲である。第五冊の教育目的の曲は少なく7曲であるが、歌詞のある4曲はいずれも英語の歌である。第六冊の外国曲は12曲である。そのうちアメリカの英語曲が1曲、スコットランド、ブラジル、スウェーデン、イタリア、フランス、チェコの歌からの英語への翻訳が6曲、インドネシア語が3曲、日本語、中国語、イスラエルの曲が原語のまま掲載されているものが各1曲ずつある。教育目的の曲は6曲あり、いずれも英語歌詞の曲である。

以上から、『My Music Book』は『Active Approach to Music Making』と比較してやや全体の歌の数は減ったものの、各民族の歌に関しても、ワールド・ミュージックの視点に関しても、『Active Approach to Music Making』の方針をほぼ踏襲しているといえる。異なる点は、シンガポールのエスニック音楽の扱いにおいて、前シリーズではマレー語の歌を除いた中国語、タミル語の歌はすべて補充歌曲に分類されていたが、このシリーズでは歌唱教材と補充歌曲がいずれの冊においてもほぼ半数ずつになったことと、タミルの曲は前シリーズでは1曲のみであったが、『My Music Book』では17曲と大幅に増加していることである。中国、マレー、タミルの歌が歌唱教材に入ったことについて、Kesevamoorthy (2011) は、ナショナル・エデュケーションの導入によるものとしている。タミル語の曲の増加については特に言及していないが、同様の理由が考えられる。

5. 2000年代以降

2000年代に入ってから芸術分野で「グローバルでコスモポリタン」なシンガポールにするための政策は継続している。2000年にNational Arts Council (国家芸術評議会) から「Renaissance City Report」が出されたが、同レポートでは、創造的な知識基盤産業と人材育成を促進するためにシンガポールをグローバルな芸術都市にすることと、継承した遺産に基づいてシンガポール人のナショナル・アイデンティティーと所属意識を高めることが、目的として示されている (Singapore Government, 2000)。2002年には湾に面したエスプラネード (Esplanade) 地区にオペラやコンサートの上演ができる総合文化施設、2003年には学部レベルの音楽学校としてシンガポール・コンセルヴァトワール (現Yong Siew Tohコンセルヴァトワール) が、相次いで設立されている。また、前述のChiaの資料によれば、2003年に出版された「Remaking Singapore Report」では、才能の早期開発のために音楽を含む芸術教育を行う国立中等教育機関を設けることが勧告されている。このように、経済のさらなる発展のための可能性をもつ分野として、芸術分野のハード面の整備とソフト面での人材育成のいずれにおいても、政府が力を注いでいることがわかる。

音楽教科書に関して見ると、『Tune In』 (Tan, 2002; Leon, 2003; 2004) 6冊が発行され、2002年から2008年まで使用された (Kesevamoorthy 2011, 39)。前項同様にKesevamoorthy (2011) の分析に基づきつつ、Suriati Binte Suradi (2005) の分析の情報も合わせて、掲載曲の確認をしていく。この教科書では歌唱教材と補充歌曲の区別がなくなっており、異なる分類方法をとったとSuriati Binte Suradi (2005) との分析対象曲数の差が1冊につき最大でも2曲となっている。

Kesevamoorthy (2011) の分析をもとに掲載曲と言語の関係を見ると、第一冊では全21曲のうちシンガポールのエスニック音楽に関しては、中国語2曲、マレー語2曲、第二冊では全27曲のうち中国語4曲、マレー語4曲、第三冊では全30曲のうち中国語2曲、マレー語3曲、第四冊では全25曲のうち中国語4曲、マレー語1曲、タミル語1曲、第五冊では全18曲のうち中国語2曲、マレー語3曲、タミル語1曲、第六冊では全14曲のうち中国語1曲、マレー語1曲、タミル語1曲が掲載されている。全学年を通してみると中国語15曲、マレー語14曲、タミル語3曲となり、エスニック音楽の曲はいずれの言語でも大幅に減っている。

外国曲としては、第一冊に英語への翻訳歌詞のフィリピンの歌1曲、インドネシア語1曲、英語歌詞のイギリス3曲、オーストラリア1曲の計6曲がある。第二冊には南米の英語歌詞の曲1曲、イギリス曲1曲、英語に翻訳されたドイツ曲1曲の計3曲が掲載されている。第三冊には原語歌詞のままの韓国曲1曲、アメ

リカ2曲、翻訳されたドイツ曲1曲とスコットランド曲1曲の計5曲、第四冊にはインドネシア語3曲、英語翻訳のメキシコ曲1曲、アメリカ曲が4曲、英語に翻訳されたジャマイカ曲1曲、英語歌詞のスコットランド曲1曲、ドイツ曲1曲、アイルランド2曲の計13曲が掲載されている。第五冊には、タガログ語のフィリピン曲1曲、すべて英語歌詞のカナダ1曲、ドイツ2曲、グルジア1曲、イギリス1曲の計6曲が含まれる。第六冊にはインドネシア語1曲、イギリス2曲、アメリカ1曲、英語に翻訳されたチェコ曲2曲とドイツ1曲の計7曲がある。Kesevamoorthy (2011) の分析の第二冊の外国曲の小計には4曲、第五冊の小計には7曲と書かれているが、詳細の分析にはそれぞれ3曲、6曲の記載しかなく、その理由は不明である。

Kesevamoorthy (2011) の分析では、教育目的の歌の数は6冊で計61曲となっている。前述のように分類方法が異なるため、分析対象となった曲の数はSuriati Binte Suradi (2005) の分析と一冊につき最大2曲程度の差があり、また民族文化で分類するか言語で分類するかの違いのため、中国、マレー、タミルの歌の分類にも1曲程度の違いがあるが、それらを考慮に入れたとしても、教育目的の歌はほぼすべて英語歌詞のものであると考えることができる。

以上からいえるのは、まず教科書全体としての歌の数が激減したということである。『My Music Book』では歌唱教材183曲と補充歌曲34曲の計217曲が掲載されていたが、『Tune In』では135曲となった。さらにシンガポールのエスニック音楽について言えば、『My Music Book』では中国語が26曲、マレー語が24曲、タミル語が17曲の計67曲あったものが『Tune In』ではそれぞれ15曲、14曲、3曲の計32曲にまで削減されている。英語の歌の数も大幅に減少しているが、他の言語の歌との比較において英語歌詞の歌が圧倒的に多いことに変化はない。教科書以外にCDやインターネット等の教材の活用も可能になっており、授業で扱う曲全てを教科書に載せる必要がなくなったことも一因であると考えられるが、詰め込み教育から芸術分野の人材を育てるための創造的な教育への政策転換の影響でもありとされる。

また、このシリーズの特徴として、第六冊に新たに「narrative and dramatic music」という舞台芸術に関する章が設けられたことがあげられる。この章ではインドネシアやマレーシアの影絵劇であるワヤン・クリット、日本の文楽のほか、インドやタイの古典舞踊、中国やイタリアのオペラなどについて学ぶことになる(Kesevamoorthy 2011, 44)。また、オペラ「ミカド」やミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」などの曲も劇場でのマナーの話とともに掲載されており、エンターテインメント分野での経済発展をめざす政策がいつそう明確になっている。

『Tune In』の後、2008年以降になると複数の種類の教科書が出版されるようになった。本稿では、オルフ・メソッドおよびゴダーイ・メソッドに基づいて作られた2008年発行の『Perfect Match Music』(Zhu, Zhang, Zhang & Chen, 2008; 2009) を取り上げる。Kesevamoorthy (2011:65) の研究では、第一冊に掲載されている曲は16曲、第二冊は19曲、第三冊は13曲、第四冊は22曲、第五冊は16曲、第六冊は15曲である。第一冊にはシンガポールのエスニック音楽はなく、第二冊にマレー語2曲が含まれる。Kesevamoorthyの分類ではこのほかに中国のカテゴリーに1曲が入れられているが、歌詞は中国語から英語に翻訳されている。第三冊にはマレー語1曲、第四冊には中国語1曲、マレー語2曲、タミル語1曲、第五冊には中国語1曲、マレー語1曲、タミル語1曲、第六冊には中国語1曲、タミル語1曲が掲載されており、全体を通しては、中国語が4曲、マレー語が6曲、タミル語が3曲の計13曲となっていて、前シリーズの『Tune In』よりさらにエスニック音楽の数は減っている。

以下はKesevamoorthy (2011, 65) の分析をもとに筆者が各曲の歌詞の言語を確認した結果である。外国曲は第一冊ではアメリカ5曲とイギリス(イングランド)2曲の計7曲である。第二冊には外国曲5曲のうちイギリス3曲、スペイン1曲、ドイツ1曲が含まれるが、著者が調査したところではいずれも英語の歌詞となっている。第三冊の外国曲は5曲で、イギリス2曲、ロシア1曲、ドイツ1曲、日本1曲となっている。ロシアとドイツの曲は英語の詞、日本の歌は「ドラえもん」であるが、日本語歌詞がそのままついている。第四冊の外国曲は10曲で、韓国2曲、日本1曲、インドネシア1曲、フィリピン1曲、アメリカ1曲、ドイツ1曲、アイルランド2曲、スコットランド1曲となっている。韓国、日本、インドネシアの曲はもとの言語の歌詞、その他の6曲はすべて英語の歌詞となっている。第五冊の外国曲は7曲で、カナダ1曲、ウクライナ2曲、ロシア1曲、デンマーク1曲、ドイツ1曲、イギリス1曲であり、全て英語の歌詞である。第六冊の外国曲は6曲あり、ケニア1曲、南アフリカ1曲、アメリカ1曲、オーストラリア3曲である。このうち原語の歌詞である南アフリカの1曲以外は英語の歌詞である。これらを合わせると、外国曲のうち英語歌詞のものは34曲、もとの言語の歌詞のものは6曲である。また、教育目的の歌は第一冊9曲、第二冊11曲、

第三冊7曲、第四冊8曲、第五冊6曲、第六冊7曲の計48曲あり、すべて英語の歌詞である。

エスニック音楽、外国曲、教育目的の歌すべてを合わせると、英語曲83曲（ただし1曲はKesevamoorthyの分類ではエスニック音楽の中国カテゴリーに含まれている）、中国語3曲、マレー語6曲、タミル語3曲、その他の言語が6曲となり、英語へのシフトが顕著である。また、この教科書では、鑑賞や演奏の活動が多く取り入れられていること、エルビス・プレスリー、ビートルズ、ボブ・ディラン、アバなど、欧米の大衆音楽が多く掲載されていること、外国曲を英語訳ではなく原語のまま歌う歌唱教材があること、インターネットやCDを活用することが増えたことなど、これまでの教科書と比較して大きく変化している。エンターテインメント産業育成のために欧米大衆音楽の人気アーティストのコンサートを誘致したり、商業音楽を作曲したりする能力をもったシンガポール人を育てる、グローバルでコスモポリタンなシンガポール人を育てるといふ、2000年代のシンガポールの政策に沿った変化である。

おわりに

シンガポールは建国以来、常に国民形成と経済発展という大きな課題を抱え、それを達成すべく政策を打ち出してきた。異なる民族から構成される国民をまとめるために、民族間の平等と経済発展を基盤とするとともに、努力を続けなければこの豊かな国家を維持できないという危機感を、国民共通のアイデンティティーとして作り上げてきた。音楽教科書に反映された国民形成の過程は、各民族が個々に子孫の教育を行っていたものから、一国という枠組みの中での各民族文化の共存、英語および西洋の音楽原理にもとづく普遍的な音楽教育へと変化してきた。そして現在は、グローバルでコスモポリタンであるシンガポール人のアイデンティティーのために、かつては脱却しようとしていた西洋文化と英語という植民地時代の遺産を活用して、芸術分野におけるシンガポール国民の活躍の場を世界に広げようとしている。Brown (2000) は、グローバル化によって国家の存在意義がゆらいでいるという議論もあるが、グローバル化が国民国家の土台を侵食するか否かは、国家が経済戦略のみでなくどのようなイデオロギー戦略をとるかにかかっており、シンガポールはイデオロギー戦略による国民形成を行っている事例であるとしている。建国当初から国民国家としての脆弱性を抱えながらも、それを逆手にとって巧みに国民形成を行ってきたシンガポールが、どのようなシンガポール・アイデンティティーによってグローバル化時代を生きようとしているかは、既に音楽教育教科書の中にも現れている。

註

1. 2017年8月30日にSingapore National Institute of EducationのChia Wei Khuan教授とインタビューを実施した際に提供された授業用資料。

付記

本稿は、平成29年度科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 課題番号17K04793「アジアの芸術教育におけるグローバル化と国民文化形成」の成果の一部である。

参考文献

- Anderson, B. (2006) : *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*. London and New York: Verso.
- Bangchud, D. (2012) : The transmission of the patriotic popular songs to enhance national consciousness. A paper orally presented at the 5th Comparative Education Society of Asia Conference, Chulalongkorn University, July 10-11, 2012.
- Brown, D. (2000) : *Contemporary nationalism: Civic, ethnocultural and multicultural politics*. London: Routledge.
- Chong, S. N. Y. (1991) : *General music education in the primary schools in Singapore, 1959-1990*.

- (Unpublished Ed.D. thesis) . University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore (1998) : *My music book 1. Singapore*, Longman.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore (1998) : *My music book 2. Singapore*, Longman.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore (1999) : *My music book 3. Singapore*, Longman.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore (1999) : *My music book 4. Singapore*, Longman.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore (2000) : *My music book 5. Singapore*, Longman.
- Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education, Singapore (2000) : *My music book 6. Singapore*, Longman.
- Gellner, E. (1983) : *Nations and nationalism*. Ithaca: Cornell University Press.
- Gopinathan, S. (2013) : *Education and the nation state: The selected works of S. Gopinathan*. Oxon: Routledge.
- Gopinathan, S. & Mardiana, A. B. (2013) : Globalization, the state and curriculum reform. In Deng, Z., Gopinathan, S. & Lee, C. K. E. (Eds.) , *Globalization and the Singapore curriculum*, Singapore: Springer, 15-32.
- Hebert, D. G. & Kertz-Welzel, A. (2012) : Introduction. In D. G. Hebert & A. Kertz-Welzel (Eds.) , *Patriotism and nationalism in music education*. Farnham: Ashgate Publishing, 1-6.
- Hobsbawm, E. J. (1990) : *Nations and nationalism since 1780*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kesevamoorthy, S. D/O. (2011) : *World music in the Singapore primary school music curriculum*. Unpublished M.A. thesis. Singapore National Institute of Education.
- Kong, L. (1999) : Cultural policy in Singapore: Negotiating economic and socio-cultural agenda, *Geoforum*, 31, (4) , 409-424.
- Kwong, J. Y. S., Peck, E. S. & Chin, J. Y. Y. (1997) : 25 years of educational reform. In Tan, J., Gopinathan, S. & Ho, W. K. (Eds.) , *Education in Singapore: A book of readings*, Singapore: Prentice Hall, Simon & Schuster (Asia) Pte Ltd., 3-32.
- Maryprasith, P. (1999) : *The effects of globalization on the status of music in Thai society*. Unpublished Ph.D. thesis. Institute of Education, University of London, London.
- Ministry of Education Singapore (1990) : *The active approach to music making: a music programme for primary schools. Module 1, Teacher's manual*. Singapore.
- Ministry of Education Singapore (1990) : *The active approach to music making: a music programme for primary schools. Module 2, Teacher's manual*. Singapore.
- Ministry of Education Singapore (1990) : *The active approach to music making: a music programme for primary schools. Module 3, Teacher's manual*. Singapore.
- Ministry of Education Singapore (1990) : *The active approach to music making: a music programme for primary schools. Module 4, Teacher's manual*. Singapore.
- Ministry of Education Singapore (1990) : *The active approach to music making: a music programme for primary schools. Module 5, Teacher's manual*. Singapore.
- Ministry of Education Singapore (1990) : *The active approach to music making: a music programme for primary schools. Module 6, Teacher's manual*. Singapore.
- Music Textbooks Committee (1971) : *Sing and enjoy*, Singapore: Educational Publications Bureau.
- Music Textbooks Committee (1972) : *Sing and enjoy*, Singapore: Educational Publications Bureau.
- Sim, C. // National Library (2014) : *Singapore's national anthem*. Extracted from http://eresources.nlb.gov.sg/infopedia/articles/SIP_815_2004-12-23.html
(2017年9月17日閱覽)

- Sim, J. B. Y. (2013) : National education: Framing the citizenship curriculum for Singapore schools. In Deng, Z., Gopinathan, S. & Lee, C. K. E. (Eds.) , *Globalization and the Singapore curriculum*, Singapore: Springer, 67-83.
- Singapore Government (2000) : Renaissance city report is issued.
<http://eresources.nlb.gov.sg/history/events/d0504b41-06f4-4f4b-80d2-f7d84aa2086d>
 (2017年12月19日閱覽)
- Suriati Binte Suradi (2005) : *Singing in Singapore' s primary school' s music curriculum, 1965-2004*. Unpublished M.A. thesis. Singapore National Institute of Education.
- Velayutham, S. (2007) : *Responding to globalization: Nation, culture and identity in Singapore*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Zhu, A. L., Zhang, Z. P., Zhang, H. C. & Chen, H. M. (2008) . *Perfect match music primary 1*. Singapore: Pearson Education South Asia Pte Ltd.
- Zhu, A. L., Zhang, Z. P., Zhang, H. C. & Chen, H. M. (2008) . *Perfect match music primary 2*. Singapore: Pearson Education South Asia Pte Ltd.
- Zhu, A. L., Zhang, Z. P., Zhang, H. C. & Chen, H. M. (2008) . *Perfect match music primary 3*. Singapore: Pearson Education South Asia Pte Ltd.
- Zhu, A. L., Zhang, Z. P., Zhang, H. C. & Chen, H. M. (2008) . *Perfect match music primary 4*. Singapore: Pearson Education South Asia Pte Ltd.
- Zhu, A. L., Zhang, Z. P., Zhang, H. C. & Chen, H. M. (2009) . *Perfect match music primary 5*. Singapore: Pearson Education South Asia Pte Ltd.
- Zhu, A. L., Zhang, Z. P., Zhang, H. C. & Chen, H. M. (2009) . *Perfect match music primary 6*. Singapore: Pearson Education South Asia Pte Ltd.